

平成29年度 教育方法部 研究のまとめ

1 研究概要

(1) 研究主題

思考力・判断力・表現力等を育む授業づくり

～主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～

(2) 主題設定の理由

平成28年度の教育方法部の研究において、問題提示の工夫や既習事項との関連を図り、1単位時間の見通しをもたせることで、子どもが興味・関心をもって意欲的に学習に向かい、主体的な学びにつなげることができた。また、ペアやグループなどの学習形態の工夫を図り、学び合う活動を積極的に取り入れることで、対話的な学びがより深まり、自らの考えを広げ深める姿も見られた。しかし、各教科において、見方・考え方を働かせて、「深い学び」を実現させるまでには至らなかったと捉えている。

そうした中、平成28年12月、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）において、「主体的・対話的で深い学び」の具体的な内容が以下のように示された。

- ① 学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ② 子ども同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③ 習得・活用・探究の見通しの中で、教科等の特質に応じて育まれる見方・考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解や資質・能力の育成、学習への動機付け等につなげる「深い学び」ができているか。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）より
中央教育審議会（平成28年12月21日）

そこで、今年度の教育方法部では、国の教育に関する動向や昨年度の反省を踏まえ、副題を「主体的・対話的で深い学びの実現を目指して」と変更し、これまでの2カ年の研究の実践を生かし、各教科の実践をとおして、どのような工夫が授業の質的改善につながるのかという点について、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの視点から検証することとし、本研究主題を設定した。

(3) 研究目的

「主体的な学び」「対話的な学」「深い学び」の3つの視点に基づいた指導方法等の工夫や学習過程の質的改善を図ることにより、子ども一人ひとりに思考力・判断力・表現力等を育成することを目的とし、各学校の教育活動の充実に資する。

(4) 研究仮説

探究型の授業を「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの視点に基づいて、各教科の特性に合わせた学習過程の質的改善を図ることで、子ども一人ひとりに思考力・判断力・表現力等を育成することができるであろう。

(5) 研究内容

《各教科の特性に合わせた学習過程の質的改善》

- 「主体的な学び」を育むための学習過程の質的改善を図る工夫について検討する。
- 「対話的な学び」を育むための学習過程の質的改善を図る工夫について検討する。
- 「深い学び」を育むための学習過程の質的改善を図る工夫について検討する。

(6) 研究計画

研 究 内 容		
平成27年度	平成28年度	平成29年度
探究型の授業づくりの視点の検討	探究型の授業づくりの視点の検討	探究型の授業づくりの視点の検証
内容1 主体的な学びについて ○ 視点1 自力追究 内容2 協働的な学びについて ○ 視点2 学び合い	内容1 主体的な学びについて ○ 視点1 問題提示の工夫 ○ 視点2 学習過程の工夫 内容2 対話的な学びについて ○ 視点3 効果的な学習形態の選択 ○ 視点4 考えが広がり深まる交流の工夫	※ 各教科の特性に合わせた学習過程の質的改善 内容1 「主体的な学び」を育むための学習過程の質的改善を図る工夫について 内容2 「対話的な学び」を育むための学習過程の質的改善を図る工夫について 内容3 「深い学び」を育むための学習過程の質的改善を図る工夫について

2 研究内容について

(1) 内容1「主体的な学び」の視点における学習過程の質的改善を図る工夫について

「主体的な学び」のとらえ



学びに興味・関心をもって向かい、次の学びにつなげること

「主体的な学び」を育むための学習過程の質的改善を図る工夫

視点1

- ① 学習への興味や関心，解決への意欲等を高める工夫
- ② 学習への見通しをもたせる工夫
- ③ 振り返りの工夫や次の学習へつなげる工夫

① 学習への興味や関心，解決への意欲等を高める工夫

- ・ 本時の目標を達成するために必要となる課題を与えることができるような問題の提示を工夫するとともに，子どもに「やってみたい」といった興味・関心をもたせたり，「できそうだ」という解決への意欲を高めさせたりすることが大切であると考える。

（例）問題や課題設定の工夫

- ・ 生活の中の場面を設定する
- ・ 既習の事柄を活用できる工夫をする
- ・ 異なる予想が生じるような「問題」を提示する
- ・ 誰もが予想や見通しをもつことができるような「課題」を提示する など

② 学習への見通しをもたせる工夫

- ・ 単元全体の見通しをもたせるとともに，この単元でどんな力を身に付けるのか，何のために学習するのかといった「目的意識」や「必要感」をもたせることが大切である。1 単位時間の中では，問題解決のための見通しをもたせることも，子どもの主体的な学びにつながると考える。

（例）見通しをもたせる工夫

- ・ 単元全体の学習計画を提示する（何を学ぶのかを明確にする）
- ・ 本時における学習の流れや，学習活動の手順等を子どもと一緒に確かめる
- ・ 学習の目的意識・相手意識を意識した学習活動を行う
- ・ 教師の働きかけや声かけ等を通して，解決の手がかりを示す など

③ 振り返りの工夫や次の学習へつなげる工夫

- ・ 振り返りの場면을位置付け，子どもが本時の学習の成果を振り返ることができるようにするとともに，次の学習や実生活に生かしていこうとする思いをもつことができるようにすることが大切であると考える。

（例）振り返りの工夫

- ・ 成果（何がわかったか，何ができるようになったか等）を確認する
- ・ 自己評価，相互評価を行う
- ・ 適用問題に取り組むなどして身に付けた知識や技能を活用するよさをあじわわせる
- ・ 価値ある学びや態度をつかみ，価値付け・賞賛を行う など

(2) 内容2「主体的な学び」の視点における学習過程の質的改善を図る工夫について

「対話的な学び」のとらえ



他者の考えと交流しながら自分の考えを広げ深める学び

「対話的な学び」の視点における学習過程の質的改善を図る工夫

視点2

- ① 考えが広がり深まる交流の工夫
- ② 効果的な学習形態の選択の工夫
- ③ 全員が交流できる環境づくりの工夫

① 考えが広がり深まる交流の工夫

- ・子どもが自分の考えを「話したい」「伝えたい」、または「相手の考えを聞きたい」「一緒に相談したい」など、授業のねらいに向かって、子ども自身が対話したいと思えるような交流の必然性をもたせることが大切であると考え。
- ・相手の考えを受け入れるだけではなく、「本当に正しいのかな」「他の考え方はないのかな」と考えながら交流を深め、最終的には自分の頭で判断する習慣を身に付けることも大切である。疑問が投げかけられると、相手に理解してもらうために説明しようとする力の向上も期待できる。

② 効果的な学習形態の工夫

- ・学び合いの目的や対話の視点を明確に示し、効果的な学習形態（ペア、グループ、一斉等）を工夫することで、対話的な学びがより深まると考える。
- ・「対話」を取り入れること自体が目的ではなく、学習活動のねらいを実現するためにふさわしい学習形態を考え、学び合いの目的や必要感を子どもにしっかりととらせることが重要であると考え。

③ 全員が交流できる環境づくりの工夫

- ・発表に苦手意識のある子どもには、「他の人の発表をそのまま話す」ことを認めるなど、話すことへのハードルを下げるなどの工夫が大切であると考え。
- ・「えっ?」「本当?」「絶対?」と教師が投げかけたり、子どものつぶやきを取り上げ、「あなたはど
う思う?」と学級全体に問い返すなど、教師が対話をファシリテートしていくことも大切である
と考える。

(3) 内容3「深い学び」の視点における学習過程の質的改善を図る工夫について

「深い学び」のとりえ



各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、考えを広げ深める学び

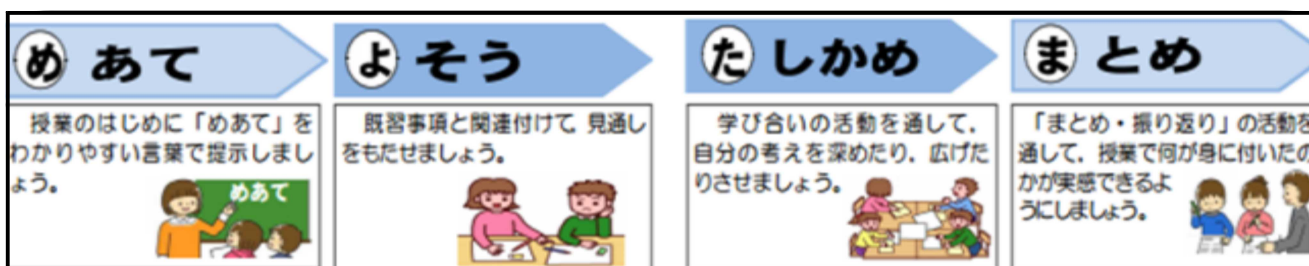
「深い学び」の視点における学習過程の質的改善を図る工夫

視点3

- ① 学習過程の工夫（探究型の授業）
- ② 「見方・考え方」を働かせる工夫

① 学習過程の工夫（探究型の授業）

- 問題解決的な学習を通して、課題解決に向けて、各教科の見方・考え方を働かせながら、主体的・対話的に課題を解決していく「探究型の授業」を充実させることが重要だと考える。



- ただ単に、問題解決的な学習の過程で授業を行っていただければいいのではなく、子どもたちの追究意欲を高める学習展開にすることが大切である。
- 教科の特質や学習内容によっては、必ずしも問題解決的な学習過程にあてはまらないものもある。「め・よ・た・ま」を基本としながらも、学習過程を柔軟に工夫することが大切である。
- 本時の学びや既習の内容を生かして学習することのできるような、応用・発展的な学習を取り入れるなど、獲得した知識を活用する場面を設定することが大切である。
- 振り返りの場面で自己評価や相互評価を取り入れるなど、学びの深まりを実感できるような場を設定することが大切である。

② 「見方・考え方」を働かせる工夫

- どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、その教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせるため、本時で身に付けさせたい力や活動の目的を明確化するなどにより、問題を見いだして解決策を考えたり、情報を精査して考えを形成したりさせることが重要だと考える。

3 研究方法について

- 各教科における、3つの視点に基づいた質的改善を図るための工夫の有効性について検証する。

4 授業実践例

《小学校第3学年国語科 きせつの言葉を集めよう ー秋・冬ー》

(1) 目標

- 秋・冬・新年を表す言葉に関心をもち、進んで言葉を集めや俳句作りをしようとしている。【関心・意欲・態度】
- 秋・冬・新年を表す言葉を集め、ワークシートに記入している。【書く】
- ◎ 身の周りから秋・冬・新年を感じる言葉を集めたり、季節や情景を思い浮かべながら俳句作りをしたりしている。【言語】

(2) 本時の展開 (3/3時間)

学習過程	児童の活動	教師の関わり	評価規準 (評価方法) *努力を要すると判断される 児童への手立て
導入	○ 前時の振り返り 集めた夏の言葉を使って、俳句作りをしたよ。みんなでかき氷の俳句作りをしたね。 ○ 俳句の中からの季語を見付けて、それが表す季節を考える。 ①名月やたたみの上にまつのかげ (秋) ②スケートのひもむすぶ間もはやりつつ (冬) ③七夕の願いも竹にしまってる (秋) 「赤とんぼ」をこの前見たよ。これは秋の言葉だね。 「七夕」は7月の行事だから、夏かな？ ○ 季節を表す言葉の中には、「七夕」のように、今とは季節のずれがあるものがあることを知る。 ○ 季節当ての正解を知り、本時は、秋・冬 (新年) の言葉に注目することを知り、めあてを確認する。 ㊦ 秋・冬を感じる言葉を集めて、季節の様子を表す俳句を作ろう。	○ 前時で作った春・夏の歳時記や子どもたちの俳句作品を掲示しておく。 ○ 秋・冬の季語の中で、分かりやすいものから少し難しいものまでを含んだ俳句を並べる。 視点1 興味・関心 ○ 七夕など、やや難しいものについては、子どもとやりとりをしたり、ヒントを出したりしながら季節分けしていく。 ○ 見付けた季語については、季節ごと種類ごとに間隔を空けて板書する。 (間隔のひみつについては、子どもに気付かせたい。) 視点3 見方・考え方	
展開	○ 秋や冬についてイメージを膨らませ、思い付いたものをワークシートに書いたり発表したりする。 「すずむし」は秋に鳴いているよ。 冬は寒いから「ストープ」をつけるよ。 「ぶとう」や「くり」は秋にとれるね。 雪が降ってくるよ。「雪遊び」が楽しみ。 うちのお母さん、「いくら」を漬けるよ。 お正月には「お年玉」をもらうよね。	○ 児童から出された言葉を核に、連想ゲーム的に問いかけながら、秋・冬のイメージを膨らませる。 ○ 出てきた言葉を、仲間分けしながら板書する。初めは教師がだまって仲間分けしているが、子どもたちがその仕組みに気付いてきたら、子どもたちに尋ねつつ、分けていく。 視点1 興味・関心	関 進んで、秋・冬・新年を表す言葉を集めようとしている。(観察・WS) *「雪」「紅葉」など児童から出てきそうなものの絵カードを用意しておき、それを見ながらイメージを広げさせる。

- 板書されていく言葉を見ながら、言葉の仲間分けに気付く。

【季節】

秋，冬，新年

【仲間分け】

動植物，気象，行事，生活

- 仲間分けについて考えながら，集めた言葉を発表する。

「くり」と「きのこ」は植物の仲間だね。

「スケート」と「雪合戦」は遊びだから，生活の仲間かな。

「学習発表会」は行事の仲間だね。ほかにどんな行事があるかな。

「お年玉」とか「初詣」は新年のことばだね。「初売り」もだね。

- 「赤とんぼ」などみんなで共通の季語で俳句を作る。

「赤とんぼ」は5音だから，初めか最後に入れると作りやすいかな。

「赤とんぼ スイス ぼくときょう そうだ」

- 同じ季語を使った俳句でも，様々なとらえ方，表し方ができることに気付く。

ぼくは「赤とんぼ」を始めた5音に入れたけど，〇〇さんは7音の中に入れているね。

〇〇さんは，スイスイっていう様子を表す言葉を使っているね。

□□さんの俳句は，赤とんぼの赤と空の青の色が出てきてきれいだね。

△△さんは，あとちょっとのところでトンボに逃げられちゃって，悔しかったんだね。

- 本時のまとめ，振り返りをする。

㊟

- ・ 自然や生活の中には，様々な秋や冬を感じる言葉がある。
- ・ 季節を表す言葉は，種類ごとに仲間分けをすることができる。
- ・ 俳句では，五・七・五音の中で使う言葉を工夫することで，様々な様子や思いなどを表すことができる。

- 新年の言葉については，冬の端の方に並べ，「新年」という仲間分けに気付かせたい。

書 見付けた秋・冬・新年の言葉を，WSに書いている。(WS)

- 板書された言葉を仲間ごとに囲み，「〇〇の言葉」とネーミングする。

言 秋・冬・新年を感じる言葉を仲間分けしている。(WS・発表)

- 児童から出された言葉を，板書する。

視点2 交流

視点3 見方・考え方

- 一般的な歳時記に載っているものとやや季節のずれがあるかもしれないが，本時では，子どもたちのもつ感覚や発想を大事にしたい。季節が分かれる言葉が出てきたら，全体で取り上げたい。

* 作業が難しい児童に対しては，声がけをしたりヒントとなるイラストを提示したりする。

- 俳句作りの約束を確認する。

- ・ 季語を入れる
- ・ 5・7・5の17音

関 楽しんで俳句作りに取り組んでいる。(観察)

- 何人かの児童の作品を，共通点や相違点に着目させながら紹介する。

- ・ 様子を詠む
- ・ 思いを詠む
- ・ 思い出を詠む
- ・ 季語の位置の違い
- ・ 擬音語や擬態語を使うなど

言 季節や様子を思い浮かべながら俳句を作っている。(俳句)

視点2 交流

視点3 見方・考え方

- 秋・冬・新年の季語を集めて仲間分けしたこと，同じ季語を使っても，人によって様々なとらえ方，表し方の俳句が作れたことに視点を当てながら，ワークシートに振り返りを書かせる。

視点1 振り返り

学習過程	児童の活動	教師の関わり	評価規準 (評価方法) * 努力を要すると判断される児童への手立て
導入	- 敬語を使ったクイズについて考える。 - 前時に学習した敬語の種類について確認し、クイズに尊敬語と謙譲語のどちらが使われているか考える。 - 敬語には使い方の決まりがあることを知る。	- 丁寧語だけを使った文と、謙譲語も使った文を提示し、どのように感じるか考えるよう促す。 - 丁寧語の使い方について振り返る。 - 敬語の種類について振り返り、クイズの文には尊敬語と謙譲語のどちらが使われているか予想させる。 - 予想した理由を確認することで、敬語の使い方には決まりがあるのではないかと考えさせる。	* 感覚的に尊敬語か謙譲語かを決めるだけでよいことを伝える。
	尊敬語と謙譲語の使い方の決まりを見つけよう。		
展開	- 六枚のカードが、それぞれ尊敬語と謙譲語のどちらを使っているかを考える。 - 正しく尊敬語と謙譲語に分けられるように相談しながら考える。 - 主語というキーワードから、尊敬語と謙譲語の使い方の決まりを考える。 - 主語が身内の時に使う敬語を考える。 - わかったことをまとめる。	- 六枚のカードを黒板に貼り、それぞれに使われている敬語が尊敬語か謙譲語かを考えて分けるように促す。 - 多数決を採り、黒板にある六枚のカードを尊敬語と謙譲語に分ける。 - 一つ一つの正誤ではなく全体の正解数を伝え、相談させながら全問正解になるまで繰り返す。 - 学習カードを配布する。 - 児童の発言から尊敬語と謙譲語の使い方の決まりをまとめる。 - 主語が身内で、尊敬語と謙譲語を使った文を提示し、どちらが適切か考えるよう促す。	[関] 敬語を使う場面や使い方に興味をもち、その使い方について考えようとしている。(観察) 視点2 考えを創り上げる * 文の主語に着目して考えることを伝える。 [言] 相手や目的に応じて適切に敬語を使い分けることができる。 (観察・学習カード)
	尊敬語と謙譲語は主語によって使い分けが必要であり、主語が自分や身内の時には謙譲語を、主語が相手の時には尊敬語を使う必要があることがわかった。		
	- 国語リーダーが中心となり、尊敬語か謙譲語かを考える問題に取り組む。 - 主語によって使う敬語を考えて学習カードの問題を解く。 - 敬語クイズを作る。	- 例文で使われている敬語が尊敬語か謙譲語かを判断する問題を提示する。最初に国語リーダーにだけ考えさせ、その後班で取り組むよう指示する。 - 問題に取り組むよう指示する。 - どうしてその敬語を使うのか、説明を考えるよう促す。 - 敬語クイズ作りに取り組み、説明も考えるよう促す。 - 早く終わった児童には、他の敬語クイズの問題に取り組むよう伝える。	* 敬語の一覧表を配布し、活用するよう伝える。 [言] 日常よく使われている敬語の使い方に慣れるとともに、相手や目的に応じて適切に敬語を使い分けることができる。 (観察・学習カード) 視点3 知識を獲得し活用する

	○ 班でクイズを出し合い、正しく問題ができているか確認する。	・主語と敬語の関係を確認する。 ・クイズの正解文と説明文が正しく書けているかを確認するよう促し、敬語の決まりの理解を深めさせる。	
終 末	○ 学習を振り返る。 ○ 次時の学習を確認する。	・本時の学習を振り返り、できるようになったことを「主語」という言葉を使って自分の言葉で表現するよう促す。 ・今日の学習の振り返りを交流する。	視点1 次の学習へつなげる [言] 相手や目的に応じて適切に敬語を使い分けることができる。 (学習カード)

《小学校第4学年算数科 変わり方調べ》

(1) 目標

- ・ 伴って変わる2つの数量の関係に関心を持ち、関係を表を用いて調べることのよさに気付いている。
【関心・意欲・態度】
- ・ 伴って変わる2つの数量の関係（和が一定）を表に表し、その関係をとらえる。【数学的な考え方】

(2) 展開

学習過程	児童の活動	教師のかかわり	評価規準（評価方法） *努力を要すると判断される児童への手立て																										
導入	○ 表の時刻から裏の時刻を当てるゲームを楽しむ。 表が 1 時の時、裏は 2 時だった。 表が 7 時の時、裏は 8 時だった。 表が 4 時の時、裏は 11 時だった。 えーっ！よくわからない？ ○ 時計名人が問題に答える様子を観察する。 なぜ、時計名人はすぐに答えられるのかな？ 時計の表と裏の時刻の関係に何かひみつがありそうだ！ ○ めあて 不思議な時計の表と裏の数の関係にはどんなひみつがあるのかな？	・ 不思議な時計を提示し、表の時刻から裏の時刻を当てるゲームをする。 視点 1 考えたい問題 ・ 時計名人が登場し、教師の問題にどんどん正解を言い当てていく。																											
展開	○ 今までの情報を整理して、関係を見つける。 <table><tr><td>表</td><td>1</td><td>4</td><td>7</td><td>3</td><td>5</td></tr><tr><td>裏</td><td>2</td><td>11</td><td>8</td><td>12</td><td>10</td></tr></table> もっと情報が欲しいなあ。 もっと見やすく並べたいな。 順番に並べてみよう。 <table><tr><td>表</td><td>1</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>7</td><td>…</td></tr><tr><td>裏</td><td>2</td><td>12</td><td>11</td><td>10</td><td>8</td><td>…</td></tr></table> 表が 3 だと裏は…。 空いているところはきっと… 表が 1 ふえると裏が 1 へる。 表と裏をたすと 15 または 3 になる。 1 時は 13 時、2 時は 14 時と考えると、表と裏をたすと全部 15 になる。 時計名人はこれらのひみつを知っていたんだ！	表	1	4	7	3	5	裏	2	11	8	12	10	表	1	3	4	5	7	…	裏	2	12	11	10	8	…	・ カードは順番通りではなくバラバラに貼る。 視点 3 見方・考え方を働かせる ・ 気づいたことをノートに書かせる。 視点 2 自ら動き出す対話 ・ 適宜ペアで交流させ、表と裏の関係に気付かせていく。	<u>関</u> 伴って変わる 2 つの数量の関係に関心を持ち、表を用いて調べることのよさに気づいている。 (発表・ノート) <u>考</u> 伴って変わる 2 つの数量の関係を表に表し、その関係をとらえる。 (発表・ノート) * 横に見たり、縦に見たりすることを促す。
表	1	4	7	3	5																								
裏	2	11	8	12	10																								
表	1	3	4	5	7	…																							
裏	2	12	11	10	8	…																							
終末	○ まとめ 表と裏をたすと 15 になる。 表が 1 増えると裏は 1 減る。 ○ 適用問題 「不思議な時計（表＋裏＝ 13）」の表と裏の関係を見つける。 <table><tr><td>表</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>…</td></tr><tr><td>裏</td><td>12</td><td>11</td><td>10</td><td>9</td><td>8</td><td>7</td><td>…</td></tr></table> ○ 学習の感想を書く。	表	1	2	3	4	5	6	…	裏	12	11	10	9	8	7	…	・ 表に表すことのよさを確認する。 ・ 別の不思議な時計（表＋裏＝ 13）を提示し、関係を見つけさせる。 視点 3 学んだことを適用する ・ 学習の振り返りをさせる。											
表	1	2	3	4	5	6	…																						
裏	12	11	10	9	8	7	…																						

《中学校第 1 学年数学科 方程式》

(1) 目標

- ・ 日常生活の中にある具体的な場面について考えるなど，方程式を利用して問題を解決しようとする。
(数学への関心・意欲・態度)
- ・ 具体的な事象の中の数量関係を見だし，方程式におきかえて，検討することができる。
(数学的な見方や考え方)

(2) 展開

学習過程	生徒の活動	教師のかかわり	評価規準（評価方法） ＊努力を要すると判断される生徒への手だて
導入	※ 3 人ずつの班になっておく。 ◇ 本時の課題（めあて）を理解する。 方程式を利用する文章題をつくる時に気を付けることは，どんなことか考えよう。	○ 課題（めあて）を提示する。	○ 「単元の学習を振り返って，課題の答えとしてどのようなことがあるかを考えてみよう」
	◇ 問題提示 問題 1 友だちに『テスト予想問題』のチェックを頼まれました。 次の問題をチェックしてみましょう。 崇茂くんは，スーパーに買い物に行きました。 1 個 200 円のお菓子を何個か買って，1500 円を出したら， おつりが 400 円でした。お菓子を何個買ったのでしょうか。 S 1 : 個人で 1 次方程式を利用して問題を解いてみる。 $1500 - 200x = 400$ $- 200x = 400 - 1500$ $- 200x = -1100$ $x = 5.5$ S 2 : 「計算で解は求められるけど…」 S 3 : 「答えが 5.5 個はおかしい」	○ 1 次方程式の解き方の復習として問題に取り組ませる。	
展開	○ 問題のどこを直せばいいか予想する。 S 1 : 「お菓子の値段」 S 2 : 「支払う金額」 S 3 : 「おつりの金額」 個別課題 A : お菓子 1 個の値段を変えて，文章題を完成させる。 個別課題 B : 支払った金額を変えて，文章題を完成させる。 個別課題 C : おつりの金額を変えて，文章題を作成させる。	○ 「問題のどこを直せばいいかを考えてみよう」 ○ それぞれを個別課題 A，B，C と設定する。 ○ 班ごとにワークシート A，B，C を配付する。 ○ 数量の間の関係を確認する。	

展開	○各班（３人）でＡ，Ｂ，Ｃのどの個別課題に誰が取り組むか決める ◇個別課題ごとの班に分かれる。 ○それぞれの課題に共通の手順で取り組む。 ◇元の班に戻る。 ○個別課題ごとの班で学んできたことを，元の班で発表し合う。 ○手順を説明し合いながら，それぞれに共通する「方程式の利用で気を付けること」を見いだす。 ◇新しい問題に班で取り組む。 問題２ 下の_____に数を入れて，文章題を完成させてください。 １個１００円のドーナツと１個_____円のケーキを合わせて_____個買いました。そのときの代金の合計は_____円でした。ドーナツとケーキは，それぞれ何個買いましたか。 ○学んだことを生かしながら，班で一番良いと考える手順で問題を完成させる。	○元の班に戻ったら自分だけがそのやり方の専門家なので，しっかり手順や気を付けるべきことを確認しながら進めるよう促す。 ○それぞれの個別課題ごとの班で学んだことを，元の班で発表できるように，伝える内容をワークシートにまとめさせる。 ○「元の班に戻り，個別課題ごとの班で学んだことを発表しよう。」 ○不十分な説明については，お互いに補い合うよう促す。 ○「課題（めあて）についても交流して，共通する「方程式の利用で気を付けること」を見付けよう」 ○数量の間の関係を確認する。	視点１ 学習の必要感 *ワークシートの内容を理解しているかを確認する。 難しいようであれば，同じワークシートのグループと交流させる。 視点２ 対話の工夫 *個別課題ごとの班での内容理解が不十分であっても可能な範囲で発表するように伝える。 ○具体的な事象の中の数量関係を見だし，方程式におきかえて，検討することができる。 【見方・考え方】 ○日常生活の中にある具体的な場面について考えるなど，方程式を利用して問題を解決しようとする。 【関心・意欲・態度】 視点３ 学びの深まり 視点２ 生徒同士の対話
終末	○それぞれの班が，どのような問題をどのような手順で完成させたのかを全体で発表・交流する。 ◇本時のまとめを行う。 ・等しい関係を見付けるなど，数量の間の関係を方程式に表して解く。 ・日常生活にあるような数値を使うことが大切である。 ・問題の場面に合った答えになるかを確認する必要がある。 など ○課題（めあて）に対する自分の考えをワークシートに書く。 ○個人で学習の振り返りをして，学び方もふくめて自己評価をする。	○それぞれの班で完成した問題の確認をする。 ○課題（めあて）について，班で気付いたことも発表させる。 ○生徒の言葉で考えを発表させる。適宜，補足する。 ○自分では気付かなかったものについても確認させる。 ○最初に考えたものと比較させ，学びの深まりを見取る。	*理解が難しかった班から説明させ，聴き手には訂正，付け加えることはないかを意識しながら聴かせる。説明に対して補足がある場合は補いながら進める。 視点３ 学びの深まり

《小学校第5学年理科 ふりこ》

(1) 目標

- ・ 支点からおもりの重心までの長さが変わると、1 往復する時間が変わることを実験を通して実感する。
【自然事象についての知識・理解②】
- ・ 振り子の長さは、支点からおもりの重心までの長さであることを理解する。
【自然事象についての知識・理解③】
- ・ 既習事項をもとに、ペットボトル振り子の運動の規則性について考え、表現する。
【科学的な思考・表現④】

(2) 展開

	主な学習活動 ・ 予想される児童の言動	教師のかかわり (◇) 評価 (◆)
導入	○ 振り子の復習をする。 T「1 往復する時間は何によって変わりましたか？」 ・ 1 往復する時間は振り子の長さで変わった。 ・ おもりの重さが変わっても 1 往復する時間は変らなかった。 ・ 振れ幅を変えても、1 往復する時間は変わらなかった。	◇ 実際にペットボトル振り子を揺らして見せて、既習事項を確認する。また、いつでも確認できるように、掲示物も準備する。
展開	○ ペットボトル振り子の演示実験をみる。 T「ペットボトル振り子の水の量を変えて実験をします。往復する時間はどうなると思いますか。」 ・ 往復する時間は変わる。 ・ 往復する時間は変わらない。 T「ペットボトルいっぱいに入れた振り子とペットボトルの水を減らした振り子を同時に揺らしてみよう。」 ・ 往復の時間はどのくらいになるかな。 ・ 往復する時間はどうなるかな。 ・ 水を減らして、重さを変えているから変わらないと思うよ。 ○ 問題を見いだす。 ペットボトルふりこの水の量を変えると往復する時間が変わるのはどうしてなのだろうか。 ○ 演示実験について話し合い、仮説を立てる。 (個人→グループ→全体) T「ペットボトルの水を減らして振り子実験をしたら、どうして往復する時間は変わったのかを話し合いましょう。」 ・ 往復する時間が変わったということは、振り子の長さが変わっているということなのかな。 ・ 変わった所は、ペットボトルの中の水の量だから、水の量が振り子の長さに関係があると思う。 ・ 振り子の長さってどこからどこまでだったかな。 ・ 振り子の長さは、おもりの中心からひもの長さまでだから、水の量が変わるとおもりの中心が変わっているんじゃない	◇ 演示実験の前に一人一人が予想を立てるよう声をかけ、立場を明らかにする。 ◇ 水を減らしたあと、子どもたちにペットボトルを持たせ、重さが変わったことを体感させる。 ◇ 往復する時間をはかるのではなく、それぞれを 10 往復まで数えて比べる。 ◇ 話し合いから今日の実験で何を確かめるのか問題をつかみ明確にする。 ◇ ふりこの長さは支点からおもりの中心までであるということについて、児童から意見が出なければ、教師から問いかける。 ◇ 振り子の既習事項を生かし、往復する時間はおもりの重さには関係ない所に着目させ、おもりの重さは関係なく、振り子の長さに着目するよう促す。

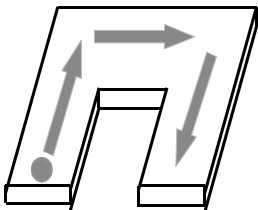
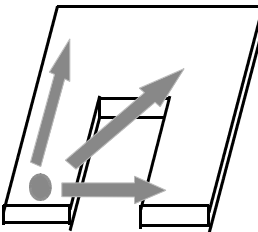
終末	かな。試したいな。 T「どのような所に着目して実験しますか。」 ・振り子の長さが変わったことが分かるように、水の中心に印をつけて実験したい。 ・振り子の往復する時間が水を減らすとどのように変わるのかを調べたい。	◇ 振り子のおもりの中心はどこになるかを確認をする。
	○ グループで実験をする。 T「グループでペットボトルの水の量を変えて実験しましょう。」 ・満タンの時と、真ん中あたりと、少ない時を実験をしてみよう。 ・水を減らしたら、水面が下がったので、おもりの中心が下がっているね。 ・水を減らしたら、どんどんゆっくりと動くね。	◇ 重さにこだわるグループがあれば、同体積の水と砂で重さを変えた実験ができるよう、準備しておく。 ◆【科学的な思考・表現④】 (発言分析・記録分析)
	○ 実験結果を交流し、整理する。 T「各グループの結果をみて、事実とそこからわかったことを整理しましょう。」 <事実> ・だんだん中の水を減らしたら、往復する時間が長くなりました。 ・水を減らしたら、おもりの中心が変わりました。 <解釈> ・おもりの中心が変わり、振り子の長さが変わった。 ・往復する時間が変わったということは、支点からおもりの中心までの振り子の長さがか変わったということが分かった。	◇ 各グループの結果(事実)を確認し、実験からわかったことは(解釈)はどのようなことかを考えるよう促す。
	○ 考察し、結論を見いだす。 T「実験結果からどのようなことが言えますか。」 ・ペットボトルの水を減らすと、重さも変わっているが、中の水面の高さが変わったことで、おもりの中心も変わり、往復する時間が長くなった。そのことから、容器やひもではなく、振り子の支点から中の水の中心までが振り子の長さとなり、中の水の量が変わると、振り子の長さも変わることがわかった。	◆【自然事象についての知識・理解②】 (発言分析・記録分析)
	○ 振り返りをする。 T「今日の実験から考えたことやわかったことをまとめましょう。」 ☆ 時間があれば、振り子の長さ(支点からおもりの中心)をそろえる実験をする。往復する時間がそろうことを確認する。	◇ 重心が実感できるような教具を提示する。 ◆【自然事象についての知識・理解③】 (発言分析・記録分析)
	水の量を変えると(重さだけではなく)ふりこの長さが変わるので、往復する時間が変わる。	

《小学校第4学年理科 もののあたたまり方》

(1) 目標

- ・形状を変えた時の金属の温まり方について考え、表現する。【科学的な思考・表現②】
- ・金属は熱せられた部分から順に温まることを理解する。【自然事象についての知識・理解①】

(2) 展開

学習過程	児童の活動	教師のかかわり (○) と評価規準 ※努力を要すると判断される児童への手立て
導入	1 本時の問題を確認する。 形を変えた金属板はどのような順にあたたまっていくのだろうか。 2 前時までを振り返る。 前時は形を変えた金属板の温まり方について仮説を立て、実験結果を予想した。	○前時の振り返りで児童から出された疑問を基にして問題提示をする。 ○前時までの学習を掲示物などを使って振り返る。
	3 予想の交流をする。 視点2 課題の解決、考えを創る工夫 予想される児童の答え① 正方形の金属板は、熱せられた所から順に、まわりに広がるように温まるのだから、コの字型でも板に沿って広がるように温まるはずだ。  予想される児童の答え② 正方形の金属板は熱せられた所から順に、まわりに広がるように温まるのだから、コの字型でも空中を熱が伝わって広がるように温まるはずだ。 	【科学的な思考②】 (発言分析・記録分析) ○根拠を基に自分の考えが言えるよう、ワークシートを活用する。 ○ネームカードを活用し、自分と他者の予想を比較することで、自分の考えを明確にする。
展開	4 実験をして確かめる。 視点2 情報の収集・整理の工夫 ・実験方法と手順は前時の実験と同じ。 ・実験中は、ろうのとけ方の様子を、言葉にして伝え合いながら観察する。 ・実験が終了したら、グループで話し合いながら結果を書く。	○火を当てる位置を統一するため、グループ毎に確認する。 ○グループ内で、変化の様子を確認しながら観察するよう指示する。
	5 結果を図示し、グループ毎に板書する。 ・板書された各班の結果を見比べ、共通点・相違点を確認する。 ・明らかに異なる結果が図示されている場合には、もう一度再実験を行い、確認する。	○グループ毎の結果を見比べる時間を十分に確保し、結果から分かることについて考えさせる。

	コの字型の金属板でも熱したところから順にろうがとけた。 コの字型の金属板も金属棒や金属板と同じように熱した所から順にろうがとけた。このことから、金属板は形を変えても熱したところから順に温まっていくことがわかった。 6 結果からわかったことを考察する。 視点1 興味・関心を高める工夫 視点3 知識の獲得・活用の工夫 7 さらにちがう形でも熱したところから順に温まるかどうかを確認する。(演示実験) ・形を変えても熱したところから順に広がるように温まることを確認する。	○結果から分かったことについて，児童の言葉を生かして考えさせる。 ○知識の定着が図れるような教材の形を選び，提示する。
終末	8 結論を導き出す。 形を変えた金属板でも，熱したところから順に広がるようにあたたまる。 9 本時の振り返りをする。	【自然事象についての知識・理解①】 (発言分析・記録分析) ※前時の掲示物を振り返り，参考にしながら結論を導く。

《小学校第4学年 外国語活動 すきなものをつたえよう》

(1) 目標

- ・好きな食べ物を紹介する表現に慣れ親しむ。(外国語への慣れ親しみ)
- ・日本語の中の食べ物の外来語と、英語の音の違いに気づく。(言語や文化に関する気付き)

(2) 展開

学習過程	児童の活動	教師のかかわり	評価規準 (評価方法) *努力を要すると判断される児童への手立て
導入	○ 挨拶をする。 ○ 自分の出席番号を尋ねられたら手を挙げ、教師が話す名前の言い方を聞き、自分の名前を言う。 ○ 先生の好きな食べ物 (料理) を聞く	・絵を板書して “Good afternoon.” の意味を捉えさせる。 ・クラスの人数を数え、出席番号に必要な数を確認する。 ・指導者が英語でフルネームを言い、指し示した児童のファーストネームだけを言って、思い出そうとする様子を見せ、児童のフルネームを引き出す。 ・教師が好きな食べ物 (料理) を話す。	curry and rice ramen, fried rice sushi, hamburger fried chicken, soba grilled chicken takoyaki french fries cake, ice cream coffee, milk, juice 視点1-②類推しやすい活動
展開	○ めあて 好きな食べ物について言ったり尋ねたりしよう。 ○ 食べ物の語の言い方に慣れる。 【Sit Down Game】 ・指導者が話す好きな食べ物の表現を聞き、自分が好きかどうかを尋ねられたら手を挙げる。 ・指導者の指示で立ち、好きな食べ物を確認する会話が終わったら座る。	(児童に提示しない) ・自分の好きな食べ物全てに手を挙げて良いこととする。	気 日本語の中の外来語と、そのもととなる英語の音の違いに気づいている。 (聞く様子の観察) 視点1-①思いを伝える活動
閉	教師 : What food do you like? (黒板に掲示してあるカードを指しながら) Who likes curry and rice? (手を挙げるジェスチャー) 〈手を挙げた児童へ〉 Stand up, please. (立つジェスチャー) 〈立っている児童個々に〉 教師 : You like curry and rice. I like 違う食べ物. 児童 : (I like curry and rice.) …発話は無理に求めない Sit down, please. 《次の児童へ》		
	○ 好きな食べ物を尋ねたり答	・全員に What food do you	慣 好きな食べ物を尋ね

《小学校第6学年外国語活動 Let's go to Italy.》

(1) 目標

- ・自分の思いが伝わるように思考しながら、行きたい場所について聞いたり話したりしている。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- ・行きたい場所について、尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。(外国語への慣れ親しみ)

(2) 展開

学習 過程	児童の活動	教師の関わり	□評価規準（評価方法） ※努力を要すると判断される児童への手立て
導 入	○ 挨拶をする。 ○ 今日の日付、曜日、天候を答え、4 線紙に記入する。 【Sit Down Game】 ・ Hi, friends!2 P14-15 の町の地図の中で、明日友達の誕生日パーティーがあるとしたら、自分が行った方がいいと思う場所を考える。 ・ その場所を尋ねられたら、手をあげる。	・ 児童を全員起立させて質問する。 ・ 明日友達の誕生日パーティーがあるとしたら、自分が行った方がいいと思う場所を尋ねる。 ・ Hi, friends!2 の町の地図に出ている建物以外を考えてもよいことを伝える。 ・ 質問内容に該当した児童を座らせていく。	
展 開	○ めあて 行きたい場所を尋ねたり、言ったりする。 ○ もう一度修学旅行に行けるとしたら、どこに行きたい？ ・ 担任、校長先生、教頭先生の行きたいところを当てる。 ・ 行きたい場所について考え、尋ねたり言ったりする。	(児童に提示しない) ・ 都道府県でも外国でもよいことを伝える。 ・ その場所で見たいものや食べたいものをヒントにする。 ・ 担任、校長、教頭でそれぞれ都道府県と外国での例を示す。(ヒント例) I want to go to the Colosseum. I want to see soccer game. I want to eat pizza and spaghetti. Where do I want to go? ・ 数名の児童に、I want to go to Italy. Where do you want to go? と個別に尋ねていく。 ・ Sapporo や Tokyo, America など、児童が行きたい場所について単語だけなどで答えた場合	視点1 思いを伝える活動 慣 行きたい場所について聞いている。(観察) 視点2 目的をもったやり取り 慣 行きたい場所や国について、尋ねたり言ったりしている。(観察)

	・ 4 線紙に行きたい場所を記入する。 ・ 先生の後に続いて言う。 (自分が 4 線紙に記入した文章のときのみ)	は, You want to go to Sapporo. とフルセンテンスで復唱し, 次に答える児童のモデルとなるようにする。 ・ 他の児童に対し, 教師と一緒に質問するよう促したり, 募ったりする。 ・ 時折別の児童に, 友達がどこに行きたいと言ったかを尋ねたりし, 聞かなければいけないといった緊張感をもたせる。また, ここでも復唱しインプットにつなげる。 ・ 手本を示し, 児童がスムーズに書けるようにする。 ・ I want to go to <u>都道府県</u>など。	
終 末	○ 週末に行きたいところはどこ? ・ 週末に行きたい場所について, 先生や友達と尋ね合う。 ○ 今日の学習を振り返る。 本時で学習した内容を話し合い, 全員で確認する。 ○ あいさつ	視点 1 思いを伝える活動 視点 3 表現を整理・活用する場面 ☐ 自分の思いが伝わるように, 積極的に行きたい場所について聞いた話したりしている。 (観察) ・ That's all for today.	

※ 児童が, 本単元で使われる外国語表現の言い方や意味を推測したり, どうすれば相手の思いが理解できるか, どうしたら相手に思いが伝わるのかなどを考えたりしながら学ぶことができるようにするため, めあての提示をあえて行わないこととした。

5 授業実践における成果と課題

授業実践において、次のような成果と課題が見られた。

(1) 視点1「主体的な学びの工夫」

【成果】

① 国語

- ・学ぶ必要感をもつことができる課題を設定したり、発問をクイズ形式にしたりすることで、子どもたちは興味・関心をもって学びに向かうことができた。
→第5学年の「敬語」の学習では、敬語を使った6つの文例について、尊敬語と謙譲語のどちらが使われている文なのかを二つに分類するといった制限を設けた発問を取り入れた。課題に興味をもたせるだけではなく、全員が自分でもできそうだと感じ、一人ひとりが自分の思いや考えをもって学びに向かうことができた。また、どの子も自分の考えをもち、他者を行う自然な交流は、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりすることにもつながった。

② 算数・数学

- ・教科書の問題をアレンジしたり、問題の提示の仕方を工夫したりすることで、子どもの興味・関心を高め、主体的な学びにつなげることができた。
- ・子どもに「解いてみたい」と思わせる問題を提示し、課題解決に向けた学習活動の見通しをもたせることで主体的な学びにつなげることができた。

③ 理科

- ・既有知識を揺さぶったり、素朴概念を覆したりするような事象と出会わせることにより、興味・関心をもって主体的に問題解決に取り組ませることができた。

④ 外国語活動

- ・子どもたちが思いつきやすいシチュエーションを設定することで、自分の思いを表現したい、聞きたいという意欲を引き出し、主体的に取り組むことができた。
→子どもが自分のこととして英語を聞いたり話したりできるように、好きなことや行ってみたい場所などの内容を、自然な会話として成立させながら、自分にも相手にも意味のある英語表現として多く聞いたり、話したりするシチュエーションを設定するよう工夫してきた。たとえば「修学旅行にもう一度行けるとしたら、どこに行きたいか」などがあげられる。
その結果、子どもが、教師や友達の話す英語を類推しながら集中して聞いたり、自信をもって自分のことを話したりするようになってきた。

【課題】

① 国語

- ・子どもが必要感や意欲をもちながら学び続けるためには、深い教材研究をベースとした課題の設定や発問の工夫が必要である。

→第5学年の「敬語」の学習では、ただ簡単な問題では思考にはつながらず、やる気、やりがいにもつながらない。自分の考えをもたせるためには、個人によって考えに違いが生まれるような言語活動や発問の工夫が必要である。より良いものを考えたり比べたりする中で、最初感覚で決めていた自分の考えが、対話を通して揺れ動きながら論理として深まっていき、授業のねらいに向かっていくことができるような発問であることが重要であり、そのためには何より教材を深く見つめた事前の準備が不可欠である。

② 算数・数学

- ・子どもに十分対話させたり思考させたりするために、教師が話しすぎないように学びの主体を子どもに委ねることも必要である。
- ・振り返りの時間を十分確保するために、1単位時間の時間配分を吟味する必要がある。

③ 理科

- ・問題を解決するための観察・実験方法や手順について、より子どもに目的意識と必要感をもたせるようなはたらきかけが大切である。
→観察・実験方法を児童自身に考えさせるなどすることで目的意識を明確にし、主体的に学習に取り組ませることができる。

④ 外国語活動

- ・各単位時間で、扱った内容に関連性や連続性をもたせることが難しく、1単位時間の流れにバリエーションをもたせにくい。
→一つの単元の目標表現が同じことと、単元の中の単位時間ごとにバリエーションをもたせるための内容が乏しかったため、1時間ごとの流れが似通ったものとなりがちとなった。

(2) 視点2「対話的な学びの工夫」

【成果】

① 国語

- ・友達との交流を通して、子どもは自分の中の語彙や言葉のもつイメージを広げることができた。
→第3学年の「季節の言葉を集めようー秋・冬ー」という学習では、子どもたちが秋の季節を連想する事柄をそれぞれにもちつつ交流をし、友達の考えにも触れることで、自分の中にはなかった語彙を獲得したり、秋のイメージをより広げたりすることができた。

② 算数・数学

- ・情報を収集・整理する活動を取り入れることで、子ども同士が意欲的に対話し、考えを広げたり深めたりすることができた。
- ・多様な考え方が生まれるような問題を提示し、活動の状況をみて小交流の形態を適宜変更しながら、何度も思考・表現し直すことで子どもの思考力・判断力・表現力等の育成につなげることができた。

③ 理科

- ・個人の考えをもたせてから対話に取り組みさせることで、自分と友達の考えの共通点や差異に気づき、問題解決に向かわせることができた。

④ 外国語活動

- ・コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、教師と子どもの間で対話が図られた。その結果、対話に意味をもたせることができた。
→指導者と子どもの対話の形式を多く設定することに重点を置いてきた。指導者が話すことの意味をジェスチャーや板書、絵カードなどを手がかりとしながら意味を類推させ、繰り返し聞かせることで、子どもが「このような意味ではないかな」「では、自分のことはどのように言えばいいのかな」「先生の真似をして言えばいいのかな」というような思考の流れとなり、主体的な対話が図られるようになった。

【課題】

① 国語

- ・身に付けさせたい力は何かを明確にとらえ、交流の視点をより意識させたり、子どもの意見やつぶやきを適宜結び付けることが必要である。
→教師が子どもから出てきた言葉をただ受け止めるだけでなく、子ども同士の発言を結び付けることで、さらに子どもたちの言葉のイメージを広げさせ、考えを深めさせていくことができる考える。
例えば、ある子が「落ち葉」と言ったとすると、それに伴って、「もみじ」と言う子が出てくる。そこで教師は、「落ち葉にもいろいろあるね。」「もみじは真っ赤できれいだね。」と2人の発言を結び付けたり、「他にはどんな落ち葉があるかな。」と問い返したりする。そうすることで、「イチョウは黄色い」など、様々な落ち葉のイメージが子どもたちの中で広がっていくことであろう。このように教師は、ファシリテーターとして、子どもたちの発言を受け止め、つなぎ、広げていくことができる存在でありたいと考える。

② 算数・数学

- ・教師の意図や目的に応じて、小交流の形態をさらに工夫する必要がある。
- ・対話の時間を十分に確保するとともに、その学習形態の意図を子どもが理解した上で活動を進めていく必要がある。

③ 理科

- ・より深まりのある対話とするために、よい発言や問題解決に向かうようなつぶやきを意図的に拾い上げ、授業を行う必要がある。
→事前に、問題を解決するためのキーワードとなる言葉を洗い出したり児童の考えを把握したりしておくこと、さらに、期待する発言があった時に、問い返しをしたり補足発言を促したりすることなど、子どもを巻き込むような仕掛けを授業内でつくるための準備と工夫をしておく必要があると考える。

④ 外国語活動

- ・子ども同士の対話の中で、発話や応答に対して感情や興味をもたせることが難しかった。
→子ども同士での対話という点では、指導者と子どもの間で行われた対話のように、感情や興味をもった表現のやり取りをするための場面設定がしにくかった。1単位時間の中での子どもの様子を見取った活動内容の変更等も視野に入れながら活動計画を立てる必要性を感じた。

(3) 視点3「深い学びの工夫」

【成果】

① 国語

- ・言葉のもつ意味や関係性に注目しながら、季語から季節のもつイメージを広げたり、より正しい敬語の使い方について考えたりすることができた。
→「秋の言葉を集めよう」の学習では、子どもたちは一つの言葉をもとにしながら関連する様々な言葉を集め、始めに自分の中にあった秋のイメージを、学習後にはより多様なものにすることができた。また、「敬語」の学習においても、例えば、修学旅行でホテルの方に話すときにはどのように話せば良いかなど、場に合った使い方を考えることができるようになった。

② 算数・数学

- ・探究型の授業をすることで、数学的な見方・考え方をしっかりと働かせながら、問題を解決していくことができた。
- ・仲間の考えを聞き、自分の考えとの共通点や相違点に気付くことで、仲間の考えの良さを認めたり、自己を振り返ったりするなど、自分の考えを一層深めることができた。

③ 理科

- ・終末では、得られた知識をもとに多面的に思考する子どもたちの姿が見られた。

④ 外国語活動

- ・目的・意味のあるやりとりを重視した活動を継続することにより、子ども自身が自らの見方・考え方を働かせて表現する姿が実生活で多く見られるようになった。
→子どもが学校生活の中で指導者に対して学習の中で経験した英語表現で語りかけてきたり、英語フレーズや歌を日常的に口ずさんだりする姿が多く見られるようになった。

【課題】

① 国語

- ・本時の学びが生かされるような適用問題を設定することが必要である。日常の中で、学んだことを生かせる場を設定していくことが必要である。
→国語で学習した言葉の力は、他教科や日常生活においても必要とされる力となる。
学んだ力をその単元だけで閉じてしまうのではなく、日常や他教科の中でも活用できる場を、意識して設定していくことが大切である。

② 算数・数学

- ・評価に関わって深い学びをしている姿を見取る工夫を、今後は検討していく必要がある。

③ 理科

- ・問題解決の過程を経て一般化した事実でも、学習や生活上における経験値が少ないことによる迷いが生じる場合がある。
→終末で児童に迷いが生じ、考えが揺らいでいる様子が見られた時には、もう一度既習事項を振り返りながら対話をして、考えを出し合い、仮説や実験方法・結果に立ち戻らせる。このことにより、「一般化した事実が当てはまる」ことに気付かせ、より深い学びにつなげていく。

④ 外国語活動

- ・実際のコミュニケーション場面で、効果的に自分の考えを伝えることについては、さらなる活動の工夫が必要である。
→コミュニケーション能力の向上に向けて、A L Tや外国語サポーター等と学んだ英語表現を活用する場面を計画上に位置付けたり、評価方法を具体的に考えたりすることについても視野に入れる必要がある。

6 研究の成果と課題

本年度の研究を通して、次のような成果と課題があげられた。

【成果】

- ・子どもたちが主体的な学びに向かうために、各教科で問題づくりや問題提示の工夫を行った。既有知識を揺さぶったり、自分事として考えさせたり、発問を制限したりすることが、子どもたちの「学びたい」「知りたい」と思う知的欲求を高める働きかけとなった。
- ・対話的な学びの場を意図的に学習に取り入れる授業改善を各教科で行った。個人思考の時間からグループ、全体へと対話の場を広げることで、深まりのある対話をすることができた。また、教師が意図して問い返したり、揺さぶりをかけたりすることで、対話の場での課題の焦点化や思考の収束につながった。
- ・習得の知識を活用した学習場面を設けたり、日常的に意味のあるやり取りを行うことで、それぞれの教科の見方・考え方を働かせて、子どもたちが深く思考する姿が見られた。

【課題】

- ・全員が見通しをもって主体的に学習活動に取り組めるように、子どもたちが「やりがい」を感じるような問題を考えたり、子どもの思考を促すような発問を工夫したりする必要がある。また、活動にも目的意識をもって取り組ませる必要がある。
- ・対話を子どもたちにすべて任せるのではなく、形式的ではない意味のある対話につながるような教師の発問を工夫していく必要がある。そのためにも、教師の「みる力（見る・観る・看る）」を高めていく必要がある。
- ・獲得した知識を実生活でも活用できる経験を多くさせ、生きて働く力につなげていく必要がある。

7 3カ年の研究のまとめ

3か年計画において推進された研究を通して、次のような成果と課題があげられた。

【成果】

- ・問題提示の仕方や学習過程を工夫し質的改善をしたことで子ども達の思考が促され、目標が明確になり、子どもが探究心をもって主体的に学ぶ姿が見られた。
- ・学び合いの活動では、交流の目的を明確にし、ペア・グループワークなどを効果的に取り入れたことで子ども達は様々な考えに触れ、思考を深めることができた。

【課題】

- ・「主体的・対話的で深い学び」についての授業改善にあたり、「何ができるようになるか」という子どもたちに必要な資質・能力を育むため、学習内容（「何を学ぶか」）を明確にし、どのような学びの過程（「どのように学ぶか」）がふさわしいのかを見極めた授業づくりについて更に検討することが必要である。

- ・「深い学び」の充実のために、より深まりのある対話ができるよう、教師の働きかけについて更に検討することが必要である。

8 次年度の展望

3か年計画において推進された研究の成果と課題を受け、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に向けた研究を推進した。研究を通して、研究員一人ひとりが、教科に特化した「見方・考え方」を軸とした学習方法の工夫や、教師の働きかけや見取り等の工夫も含め、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた、子どもの学びの過程のさらなる質の向上を図っていくことの重要性を実感した。

次年度の研究では、これまでの授業実践の蓄積を生かしつつ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、さらに質の高い学びを図っていくための指導の工夫について研究を進めたいと考える。

《参考文献・資料》

- ・「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）中央教育審議会
- ・「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）別添資料 中央教育審議会
- ・平成28年度 函館市の学校教育の指針「アプローチ」第58号
- ・平成29年度 函館市の学校教育の指針「アプローチ」第59号

〔研究担当者〕

【教育方法部：平成29年度研究員】

山 崎 修（函館市立神山小学校教諭）	中 村 健太郎（函館市立北星小学校教諭）
葛 西 猛（函館市立凌雲中学校教諭）	福 崎 梢（函館市立日吉が丘小学校教諭）
吉 田 麻夕子（函館市立柏野小学校教諭）	中 村 円（函館市立北美原小学校教諭）
保 坂 大 樹（函館市立中部小学校教諭）	横 山 嘉 弘（函館市立上湯川小学校教諭）
道 幸 篤 史（函館市立深堀小学校教諭）	濱 出 和 隆（函館市立的場中学校教諭）

【指導主事】

堤 勝 幸
 酒 井 光 史
 辰 巳 哲 治
 小 林 郁
 永 吉 幸 平